

懐かしい未来新聞

社会問題となつていっているいわゆる「ひきこもり」問題。生きつづきを抱える方への支援として、重層的支援体制整備事業の柱となるテーマです。

地域共生社会推進課では、令和5年度から本格的に庁内連携会議、外部機関を交えたひきこもり支援ネットワーク会議の二つの協働を核として、ひとつの事例を大切にしながら、支援体制の整備を開始しました。

支援の第一歩は、正しく理解することです。「ひきこもり」問題を他人事と考えずに、一緒に考えてみませんか。

“ひきこもり” 状態にある人 全国推定 146万人

(内閣府「子ども・若者の意識と生活に関する調査」2023年3月31日発表)
(15~39歳 61.9万人 40~64歳 83.9万人)

“ひきこもり”の背景の多様性について

- 中・高年齢「ひきこもり」のきっかけは退職や人間関係「職場になじめない」等を含めると全体の55%は就労が要因 (内閣府2018)
- 当事者の8割近くが就労経験者 (ひきこもり白書2021 UX会議)

精神的要因 (発達障害等) **必要に応じて医療面でのサポート**

●ただし、発達障害が原因で「ひきこもり」ではなく、コミュニケーションがうまくいかない等の発達特性に対して、周囲から十分な理解や配慮が得られず、人間関係で傷つけられて、「ひきこもり」に至る場合が多い。

社会的要因 **環境要因**

“ひきこもり”の背景は一人ひとり違う

多様化複合化 (リストラ、パワハラ、介護離職、いじめ、疾病、貧困、DV、虐待、多重債務、家族トラブル、LGBTQ など)

★前回調査
15~39歳 1.57%・54.1万人 (2015年)
40~64歳 1.45%・61.3万人 (2018年)
合計約115万人

「ひきこもり」とは、様々な要因により、社会的参加(就労、就労・家庭外での交遊など)を避け、概ね家庭にとどまり続けている状態像のことです。

ひきこもりながら、他者と交わらない形での外出、近所のコンビニや、関心のある所には一人で出かける場合も多いですが、家族以外の人との接触を絶ち、困っているにもかかわらず「助け」を求められずにいる人もいます。

“ひきこもり”を理解しよう パート1

“ひきこもり”は誰もがなりうる状態像

ひきこもりの定義 【6か月以上】

広義のひきこもり	趣味の用事のときだけ外出する	準ひきこもり
	近所のコンビニなどには出かける	
	自室からは出るが、家からは出ない	狭義のひきこもり
	自室からほとんど出ない	

2016年内閣府「若者の生活に関する調査報告書」より

内閣府による「子ども・若者の意識と生活に関する調査(令和4年度)」の結果が、令和5年3月31日に発表されました。

前回の調査結果から比べても「ひきこもり」の方は増加しています。コロナ禍による影響も考えられます。

背景に何らかの精神疾患を抱えている可能性もありますが、様々な理由で受診が困難な方も少なくありません。



発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1356
0748-69-2155

本号の紙面
★トピックス
★「ひきこもり」を理解しよう パート1
★話題 喫茶・閉庁二時間前
★きまぐれコラム
★重層物語

子ども・若者の意識と生活に関する調査R4

“ひきこもり”関連結果ピックアップ

- 調査対象者は30,000人、15歳~64歳までの有効回答者は、14,474人(回収率5割)の中で、15歳~39歳、40歳~64歳までで、広義の「ひきこもり」に該当する割合は、2.05%~2.02%であった
- 「ひきこもり」者の男女比率は、男性53.5%・女性45.1%・その他1.4%であるが、女性が前回の調査より増加している
- どの年齢もまんべんなく出現している
- コロナで趣味の外出が減少し、「ひきこもり」に影響している

「ひきこもり」は、病名ではなく、治療して直すものでもありません。

本人や家族の自己責任ではありません。そのとき、そうなるきっかけを得なかった環境や要因、社会倫理があったからと一言で言われてはなりません。

実際には、「コミュニケーションがうまくいかない等の特性に対して、周囲からの十分な理解や配慮が得られず、学校や社会で傷つけられて、「ひきこもり」に至る場合が多い」ともわかっています。

大半の人が、「この状態から抜け出したい」と思っていて、決して合伴しているわけではないのでないことを理解しましょう。

気まぐれコラム

名言
遠まわりするほどおもしろい
うまくいかないことがあるほど
いろんな人に役割がうまれる
長久手市吉田一平氏

6月23日、愛知県 長久手市で開催された地方創生実践塾に参加してきました。

私たち市役所職員は、日々の業務の中で「わずらわしいこと」や面倒だと思ふことで、対応していると、モヤモヤすることやストレスを貯めてしまっているのではないのでしょうか？

長久手市は、吉田一平市長の号令(名言は左記)で、「わずらわしいことを楽しめ」「結果を急ぐな」「半官半Xのススメ」を徹底されてのまちづくりが進められて、若手職員の企画力と実践力、笑顔に感激しました。

「市民がやってほしいことに応える」というより、「市民の〈やりたいこと〉に伴走する」ことが、主体性を導く鍵であること学びました。

さすかの「地域共生の長久手」でした。

盛況です！《喫茶・閉庁二時間前》

今年度も6月から、市役所別館で、ちょこプラグループさんが、カフェを始めています。

このカフェは、一緒に悩み相談窓口として、いろいろな相談やおしゃべりをスタッフが聞きながら、ゆっくりしてもらおう居場所づくりが特徴です。

相談を目的に来られる人も少しずつ増えてきているとのことです。

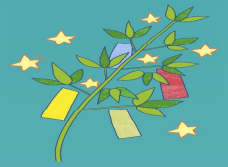
岩永市長もお墨付きのカフェに、職員の皆様も、ミーティングなど利用くださいね。

次回は、7月24日(月)~7月28日(金)が開催予定です。



続・うまくいき過ぎた重層物語

SEASON 2



6月号に続き、重層物語『あなたもわたしもクロス人材』後編をお届けします。

○黒須重子(くろすしげこ) … 48歳

2年前から地域市民センターで勤務する甲賀市職員。町内に顔見知りが多く、住民にとって話しかけやすい存在です。最近の楽しみは、週末に通い始めた珈琲教室です。

○天野さん… 72歳

妻が一昨年亡くなり、自営の看板屋をたたんでしまいました。元来、人付き合いが得意ではなく地域の集まりにも顔を出しません。民生委員に「閉じこもってはいけない」と言われ、近所にある地域市民センターに顔を出しています。

○青(そら)くん… 8歳

小学二年生になってから、授業中に落ち着いて座ってられず、友達とのトラブルも増えました。朝になるとお腹が痛くなって学校に行けない日が続いています。地域市民センターの相談室でママと一緒に心理士との面談が始まりました。

○香織… 29歳

青くんのママ。四年前に離婚し、市営住宅で青くんと暮らしています。学校に行かない青くんについて、「勉強についていけなかったらどうしよう」と、そればかりが気になります。また、職場の上司と折り合いが悪く、仕事を辞めようかと悩んでみてもいます。

○邦子… 54歳

週末の珈琲教室で重子と知り合って意気投合し、「いつか一緒に喫茶店をやろう」なんて話もしています。しかし、子どもたちが社会人となり子育てがひと段落したところに、一人暮らしの奥母が認知症と診断されて、次は介護生活かと気落ちしています。

6月号のあらすじ (前半のあらすじは、6月7日付で新着情報の掲示板第4号を見てください)

地域市民センターロビーで、人付き合いが苦手な孤独しがちな天野さんが、だだをこねる不登校の青くんと出会います。そして、青君が「絵が得意であること」を天野さんが見つけます。何度か出会っているうちに、いつも香織に叱られている青君と天野さんは、安心できる関係になっていきます。市民センターの重子は、ロビーの有効活用も考え、関係者で集まって、話し合う機会(重層的支援会議)を担当課に提案しました。

にわかには出来上がった喫茶店では、楽しい会話が続きます。邦子が「ここでカフェをします!」と宣言して、香織が「私も手伝いたい!」と賛同しました。そうしたら、喫茶店の看板は青くんと天野さんの合作で用意してもらおうとか、この喫茶店ならあの子もくるはずだとか、話ほとんど拍子です。天野さんも「看板やったらできるかな」と承諾してくれました。

いつの間にもやら、様子を見に来た民生委員や心理士、スクールソーシャルワーカーも加わり、いつものロビーは、すっかりと立派な喫茶店に様変わりしていました。香織も、重子と呼ばれた珈琲教室の友人である邦子と一緒に動いて回っています。「青くん、うれしそうね」と重子が香織に話しかけると、「ヤバイ。何か泣きそう…」と言って奥へと引つ込んでいきました。

喫茶イベントの当日、青くんが完成させた画用紙いっぱい描かれたカミナリ様の絵を見て、天野さんは「たいしたものやなあ」と驚いて何度も顔を覗きながら見ている。その姿を見て、「夜ごはん食べんと描いてん」と青くんも得意げです。重子は青くんに、なんでカミナリ様を天野さんに見せたかったのかを問うと、青くんは「おっきいカミナリ様を描いてって言われてん」と言いました。どうやら初めて会ったあの日、青くんが計算ドリルの隅っこに落書きしたカミナリ様の絵を天野さんがほめてくれたことがとても嬉しかったようです。

以来、絵を描くことに自信をつけた青くんは、図工のある日に学校へ行くようになりました。香織は邦子から珈琲の淹れ方を教えてもらう約束をしたとはしゃいでいます。それに、天野さんが丁寧に仕上げた看板が評判となり、ポラントイアグループから注文が入るようにもなりました。

重子は謎が解けたように、そうつなぐやきました。「そんな事より、喫茶店の名前どうするの?」邦子が聞いてきました。「そうねえ、元はと言えば青くんと天野さんの出会いから始まって。あの時は、喫茶店をするなんて思ってもみなかったけど……」

「予想だにしない出来事ってことね」「ある意味、青天の霹靂って感じ」重子と邦子は顔を見合せて笑いました。

(作 中井浩宮)



※この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは一切関係がありません。しかしながら、このような物語を羅針盤として、地域共生社会の実現をめざすものです。

※第四の縁… 血縁、地縁、社縁が希薄した現代社会において、新たなつながりのカタチとして、「第四の縁」の創造が希求されています。

※クロス人材… 地域の困りごとや生きづらさと、地域住民のもつ興味・関心を、意図的または偶然にクロスさせて、新たな地域活動が創出されるきっかけをつくってしまつ人材のことを言います。

偶然がうまく交わって生まれた喫茶店は、今や、ひとりの生きづらさと、「こんなまちに住みたい」といった興味・関心が出会うプラットフォームになっています。

以来、絵を描くことに自信をつけた青くんは、図工のある日に学校へ行くようになりました。香織は邦子から珈琲の淹れ方を教えてもらう約束をしたとはしゃいでいます。それに、天野さんが丁寧に仕上げた看板が評判となり、ポラントイアグループから注文が入るようにもなりました。

重子は謎が解けたように、そうつなぐやきました。「そんな事より、喫茶店の名前どうするの?」邦子が聞いてきました。「そうねえ、元はと言えば青くんと天野さんの出会いから始まって。あの時は、喫茶店をするなんて思ってもみなかったけど……」

「予想だにしない出来事ってことね」「ある意味、青天の霹靂って感じ」重子と邦子は顔を見合せて笑いました。